

国立国語研究所学術情報リポジトリ

方言意識の日韓対照：役割語翻訳の観点から

著者	鄭 惠先
雑誌名	日本語科学
巻	23
ページ	37-58
発行年	2008-04-22
URL	http://doi.org/10.15084/00002194

方言意識の日韓対照

——役割語翻訳の観点から——

鄭 惠先
(長崎外国語大学)

キーワード

役割語度, 役割語スタイル, 方言イメージ, 人物類型, 好悪意識

要 旨

本稿では、方言を役割語の一種として定義した上で、日韓両国での方言意識調査を通して、役割語としての両言語方言の共通点と相違点を具現化した。最終的には、日韓・韓日翻訳の上で、両言語方言を役割語として有効活用することが本研究の目的である。考察の結果、以下の4点が明らかになった。

1) 両言語母語話者の方言正答率から、韓国の方言に比べて日本の方言のほうで役割語度が高いことが予想される。2) 「共通語」対「方言」の対比的な役割語スタイルは、両言語母語話者の方言意識の間で共通している。3) 「近畿方言」と「慶尚方言」の間には共通する役割語スタイルが見られる一方で、一部のステレオタイプの過剰一般化が役割語度アップを促進していると推測される。4) 「東北方言」と「咸鏡・平安方言」の間には共通する役割語スタイルが見られる一方で、「東北方言」に比べて「咸鏡・平安方言」の役割語度がきわめて低い可能性がうかがえる。

以上の結果をもとに、両言語方言の役割語としての類似性を巧く生かすことで、より上質の日韓・韓日翻訳が実現できると考える。

1. 役割語としての方言

本研究は、日韓対照役割語研究の一環として行われたものである。「役割語」という用語は金水敏氏によって提唱されたもので、金水(2003)ではつぎのように定義されている。

ある特定の言葉づかい(語彙・語法・言い回し・イントネーション等)を聞くと特定の人物像(年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等)を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができるとき、その言葉づかいを「役割語」と呼ぶ。(2003: 205)

とりわけ、本稿で注目したのは、役割語として欠かすことのできない「方言」という言語形式である。鄭(2005)でも、日韓両言語によって書かれた小説や映画、マンガなどの対訳資料を対照し、「日本語でも韓国語でも、方言は人物像を連想する重要な指標となり、両言語の翻訳過程でも十分に役割語として働いている」という結論を導き出している。そういった意味で、方言を役割語の一種として位置づけた上で、日本語と韓国語の方言意識を対照することには大きな意義

がある。なお、日韓・韓日翻訳という観点から見ても、方言形式が持つ役割語としての重要性はより強調されるべきである。

金水（2003）は「役割語としての方言」について、＜標準語＞と非＜標準語＞という対立関係を中心に述べている。その中で、ある話体（文体）が、特徴的な性質の話し手を想定させる度合いとして「役割語度」という概念を導入し、「標準語」を、役割語度0の、他の役割語の基準となる特殊な役割語としている。さらに、役割語度が相当高い方言形式の話体として「んだんだ。だけど、天気予報は、明日あ雨さ降るかもしんねえって言ってたべ」のような例をあげている。

しかし、一言で方言といっても、地域によってさまざまな方言が存在する。そして、これらの各方言の間には、言語形式の違いのほかに、方言イメージなどの側面からも多くの違いが見られる。その上、日韓対照という枠にまでその範囲を広げて考えると、互いの絡み合いはさらに複雑になってくる。

こういったさまざまな方言形式の、それぞれの役割語としての実態を可視化し整理していくために、本稿では、両言語の方言についての意識調査というアプローチを取り入れた。具体的には、「方言正答率、方言イメージ、方言による人物類型、方言に対する好悪意識」といった4つの側面から両言語の各方言に対する意識を調査し、その結果を分析して、そこに映し出される各方言の役割語としての位置づけ、機能の度合いや性向について具体的に考察していく。

ここで、本稿で使用する用語について断っておきたい。まず、金水（2003）では「体系的かつ理想的な二項対立」として＜標準語＞と非＜標準語＞という用語を用いているが、本研究では両国の各地域方言を1つ1つ独立した個別の調査対象として取り上げているため、あえて「標準語」という用語は使わないことにする。その代わりに、他方言と同列での相対的な用語として「東京方言」「ソウル京畿方言」を用い、両国首都圏を中心としたこれらの方言形式を「共通語」という用語でまとめて述べていきたいと考える。

なお、本稿では、上に引用した「役割語度」のほかに、「役割語スタイル」という用語を用いる。「役割語度」が役割語としての濃度を表現した用語だとすれば、「役割語スタイル」は役割語としての形状をイメージした用語である。つまり、どの役割語的要素がどのような形で表出されるかといった個別的な性質を総合し、役割語としての全体的な性向を捉えようとしたのである。

1.1. 翻訳における方言使用

日韓または韓日翻訳が行われた小説や映画などの作品の中で、両言語の方言はどのように翻訳されているだろうか。まず、以下の例（1）～（4）では、日本の近畿方言にさまざまな韓国方言が対応している。

- | | |
|----------------------------------|----------------------|
| (1) a. いきなり調子悪うな <u>ってしもうた</u> ! | 「モンスター」 ¹ |
| b. 이거 또 고장났 <u>구먼</u> ! | 「몬스터」 |
| (2) a. ボーッと見とらんで助けて <u>えな</u> ! | 「モンスター」 |
| b. 보고만 있지 말고 나 좀 살려주 <u>랑께</u> ! | 「몬스터」 |

- (3) a. なんで言われへんの? 「東京」
 b. 와? 말 못하냐? 「동경」
 (4) a. 어데 가노 「チング」
 b. どこへ行くんや 「チング」

(1 b) は忠清方言, (2 b) は全羅方言である。また, (3 b) と (4 a) は, 従来の近畿方言の韓国語訳としてもっとも頻繁に目にすることができる, 慶尚方言の例である。例文中の下線部は, 両言語方言の特徴を表す言語形式を示したものである。日本語と同じく, 韓国語においても各地域の方言には, 文法形式, 音声, 語彙などの面でさまざまなバリエーションが見られている。

方言イメージについての先行論文である井上 (1983) によると, 近畿方言は「大らか」「やわらかい」などの情的プラスのイメージと「地味」「重い」「昔の言葉を使う」などの知的マイナスのイメージを持っているという。このイメージについての論議はさておき, 上記の例で用いられた韓国のさまざまな方言が, 原作での近畿方言のイメージをどこまで伝えているのか, はたしてどの方言がもっともふさわしいといえるのか, それを明確に判断することは難しい。

つぎに, 以下の例を見てみよう。

- (5) a. んだが 「東京」
 b. 기냐? 「동경」
 (6) a. 내래 담배 한 대 피잖수다래. 「DMZ」
 b. たばこを一服さしてもらいます。 「JSA」

(5) ~ (6) は東北方言の韓国語対応のバリエーションである。(5) では東北方言が韓国の忠清方言に訳されており, (6) では韓国語原作での平安方言が, 日本語版の小説の中で東北方言に訳されている。

方言を使った翻訳は訳者の感覚と判断にもとづいて行われるものだが, 当然ながらその選択過程では両言語の方言が持つ普遍的なイメージが強く意識される。こういった方言イメージを, いわゆる「ステレオタイプ化された方言」と表現することができる。日本でも韓国でも各地域の方言には, なんらかの形でステレオタイプが存在する。しかし, 方言に対するステレオタイプがどの程度の市民権を得ているかは, 国, 地域, 方言形式などによってかなり差があると考えられる。とりわけ, 韓国社会での各地域方言が, 日本の多くの方言ほど確固たる「ステレオタイプ」としてその地位を獲得しているかどうかといった点は気になるところである。

以上から考えると, 原作方言の訳語方言への置き換えが, 両言語話者の読者に同様の心理的影響を与えることもあれば, 逆に心理的なギャップを増幅させる可能性も看過できない。こうして, 方言は両言語間の翻訳の過程でも役割語の1つとして大いに影響を及ぼしているのである。

そこで, 本稿では, 日韓両国での母語話者に対する意識調査を通して両言語の中に存在する方言意識を対照・考察し, 各方言の役割語としての社会への浸透の程度, 方言相互間の多様な役割語スタイルの実態などを明らかにしていく。そうして, 互いの共通のステレオタイプを可視化し, 両言語翻訳で起こり得る心理的なギャップの解消に役立てたいと考える。とりわけ, 今回の調査では, 前述した例のように, 両言語間の翻訳の過程ですでにさまざまな対応が試されてきた

「近畿方言」と「東北方言」に焦点を当てて考察を進めていく。また、「共通語」と「その他の地域方言」という対比する方言意識について、両言語の間でどのような共通点と相違点が見られるかを探っていく。

1.2. 調査の概要

これまでも日本語学分野での方言意識研究は少なからず行われてきており、代表的なものに井上（1980）や佐藤・米田（1999）などがあげられる。これらはともに、全国的に実施された意識調査をもとに日本語の方言イメージについての分析を行った貴重な先行研究である。しかし、これらの先行研究と、方言と役割語を接合した「ステレオタイプ化された方言」を考察対象とする本稿とでは、そのアプローチが異なる。

従来の方言学的観点からの方言イメージ調査と違って、本研究はあくまでも、方言が役割語としてどの程度機能しているのか、どういう形で表れているのかといった観点から考察を行う。つまり、各方言に対するイメージをもとにその方言意識の具体的な性向を把握した上で、これらの特徴と特定の人物像との密接度や表出の傾向などを明らかにしていく。そこでやっと、役割語としての方言の機能が顕示化し、また各方言間の相対的な位置づけも可能になってくると考えられるのである。

また、従来の方言意識研究の中に、日本語と韓国語の方言意識の対照を扱った先行研究は皆無といっても過言ではない。両言語の方言を同じ基準のもとで考察・分析することによって、各自の方言が持つ役割語としての機能や性向もより明確に見えてくるものである。なお、本研究で行った両言語母語話者への方言意識調査は、今後の日韓・韓日翻訳での方言活用の可能性を測る1つの判断基準を示すという点でも重要な意味を持つと考える。

今回の調査は、2005年3月に韓国の4都市（ソウル、江陵、大田、大邱）、2006年11月に日本の3都市（東京、京都、長崎）で、合計644名の大学生を対象にして行われた²。表1は、両国のインフォーマントの詳細である。

表1 両国のインフォーマントの詳細

国	使用方言 (人数)								小計 (男 / 女)	
日本	東京 (42)	関東 (53)	北海道 (3)	東北 (9)	中部 (29)	近畿 (93)	中四国 (27)	九州 (61)	317 名 (87/230)	
韓国	ソウル京畿 (101)		江原 (46)		忠清 (46)		全羅 (6)		慶尚 (128)	327 名 (144/183)

方言意識調査で各インフォーマントの出身は重要な変数となるため、質問票では「自分自身がどこの地域方言を使っていると思うか」という質問項目を設けた。その結果をもとに、表1では各インフォーマントの詳細を使用方言別にまとめて示した。ちなみに、表1の小計に性別人数を

記載しているが、今回の調査結果の分析にあたって性別による有意差は認められなかったため、ここでは参考までに留めておきたい。

調査対象とした方言区画は、日本が、東京、関東、北海道、東北、中部、近畿、中四国、九州の8地域方言であり、韓国が、ソウル京畿、咸鏡、平安、江原、忠清、全羅、慶尚、済州の8地域方言である³。日本の方言区画は井上・吉岡監修（2003a, b, c, 2004a, b, c）、韓国の方言区画は李他（2004）を参考にして分類した。その理由は、調査の際に質問票で示した方言形式の引用元が井上・吉岡監修（2003a, b, c, 2004a, b, c）であったことと、現在韓国でもっとも一般化した方言基準が李他（2004）だという判断からである。

2. 方言正答率の対照

はじめに、両言語母語話者が自国の方言形式をどの程度正しく認知しているかを調べるため、各言語8方言によって書かれた文を提示し、当てはまると思われる地域名を当ててもらい調査を行った。認知度が高ければ高いほど、当該方言への意識が社会に深く浸透していると判断でき、役割語としての機能性も高いと考えられる。以下に、具体的な調査内容の例をあげる。

まず、韓国での調査では、「어디에 가십니까. (어디에 가십니까?)」「니 어디 갔어요? (너 어디 갔었니?)」「어디로 갑니까? (어디 갑니까?)」などの単文を方言別に、括弧の中の標準語形式とともに4つずつ並べた。各表現に連続性はないが、できるだけ方言同士で類似した表現になるように心がけた。たとえば、前述した提示文は順に、「どこにいらっしゃいますか」という平安方言、「あんた、どこ行ってた?」という慶尚方言、「どこに行くんですか」という済州方言の例である。

つぎに、日本での調査では、方言シリーズの井上・吉岡監修（2003a, b, c, 2004a, b, c）を参考に、同じ表現の会話文を方言ごとに示した。たとえば、中四国方言では「A：はよう 起きんさい／B：すごい ねむいんじゃけえ／A：今起きんと 遅れるじゃんか」、東北方言では「A：はえぐ 起きれー／B：しったげ ねみー／A：いま起きねば おぐれるでー」、九州方言では「A：はよ 起きらんね／B：いっじ ねむたか／A：いま起きらんば 遅るっばい」といったパターンである。

以上のような調査方法によって得られた結果をもとに分析を行った。分析の際にはより信頼度の高い分析結果を目指して、以下の2点の数値的な操作を行った。まず、表1で示したようにインフォーマントの使用方言にバラツキがあったことから、すべての項目において先に使用方言別の百分率を割り出し、それらの値をもとに再度平均値を出す計算方式を採用した。

第二に、本調査では、すべての項目において自方言に対する応答は排除し、他方言に対する応答のみをもって計算を行った。その理由は、本研究で注目しているのが「ステレオタイプ化された、役割語としての方言」だからである。これこそが従来の先行研究の調査方法との明確な違いといえる。自方言への意識は個人のアイデンティティやビリーフに強く影響される。これは、本稿で調査対象とする、「社会の共通意識」としての方言意識とはかなりギャップがあると考えたのである。以上の基準による分析から、図1のような結果が得られた。

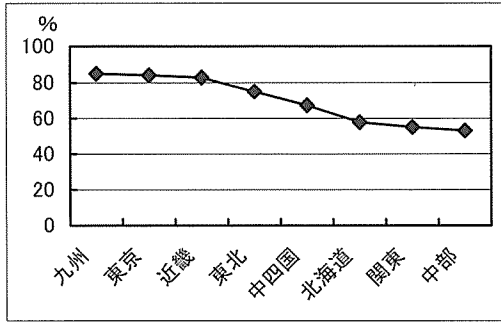


図 1a 日本での方言正答率

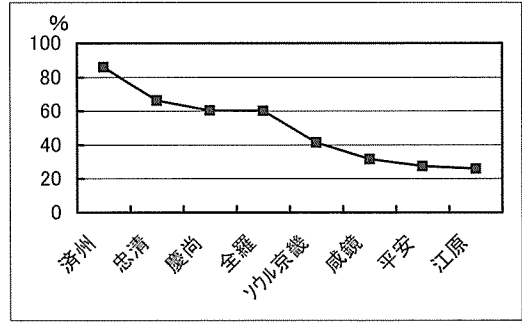


図 1b 韓国での方言正答率

まず、日本での調査結果を見ると、最高値の九州方言とともに、共通語として認識されている東京方言と、近年メディアなどで盛んに耳にすることになった近畿方言の正答率がほぼ同じ数値で高く、中部方言の正答率がもっとも低い。正答率の全体平均は 67.9% である。一方、韓国での調査結果では、済州方言の正答率がもっとも高く、南北分断の現状から実生活の中でほとんど触れることのない咸鏡・平安方言と、江原方言が同じような数値で低い。正答率の全体平均は 49.9% である。

正答率の全体平均から見て、韓国語母語話者より日本語母語話者のほうで、方言に対する認知度が高いことがわかる。これは、鄭（2005）で示した「韓国語母語話者に比べて日本語母語話者は、役割語についての知識や刷り込みの程度が高い。」という結論に相通じる結果であり、ひいては、韓国の方言に比べて日本の方言の役割語度が高い可能性を示唆する結果でもある。

続いて、この結果で注目したい点が 2 つある。

まず、1 つ目に、各方言間の正答率の差である。日本での調査結果の場合、最高値の九州が 85.0%，最低値の中部が 53.2% で、その差は 31.8% である。これに対して韓国では、最高値の済州が 85.9%，最低値の江原が 26.0% で、その差は 59.9% である。つまり、日本語母語話者に比べて韓国語母語話者の方が、各方言に対しての認知度にバラツキがあり、「よく知っている方言」と「あまり知らない方言」の差が激しいことがわかる。このように、方言間の認知度に偏りが見られるという結果から、韓国の方言では役割語として機能しうる方言形式が限られている可能性がうかがえる。しかしながら、方言形式への知識の度合いがそのまま役割語としての機能の度合いにつながるという結論は若干短絡的かもしれない。よって、本稿での役割語スタイルについての考察なども含めて、これにはさらなる分析が必要であると考え。

つぎに、注目したい点の 2 つ目は、咸鏡方言と平安方言の誤答の割合である。韓国の場合、咸鏡・平安といった朝鮮半島北部方言に対する正答率が著しく低いという特徴が見られたが、この両方言の低い正答率の裏には看過できないもう一つの要因が隠されている。調査票での平安方言の文に対する正答率は 27.5% だったのだが、その反面、誤答の中に咸鏡方言という回答が 42.4% もあり、正答率をも大きく上回っているのである。同じく、咸鏡方言の文においても正答率が 31.6% なのに対して、平安方言という回答が 30.1% もあり、正答とほぼ同じ割合を占めている。

よって、現代の韓国社会で生活している若い世代の韓国語母語話者にとって咸鏡方言と平安方言の区別は難しく、北部方言、いわゆる北朝鮮のことばという固まりとしてのイメージが強いのではないかと予想される。この結果を、役割語としての機能といった面で考えたときに、つぎのように解釈することができる。すなわち、咸鏡方言と平安方言の個別正答率からは、両言語の役割語度が低いという表面的な結果しか見えてこないが、前述した二次元的な結果までを念頭に置いて判断すれば、咸鏡方言と平安方言は「北部方言」という形で新たな役割語スタイルを形成していると考えられることも可能である。これについては、次節でさらに詳しく述べていきたい。

3. 方言イメージの対照

ここでは、両言語母語話者が自国の各地域方言について、具体的にどのようなイメージを持っているか、はたしてステレオタイプといえる方言イメージは存在するのかを考察する。そうすることによって、各方言の役割語としての意義が表面化し、役割語としての方言の機能もさらに明確に把握することができる。調査では、調査票に提示された16評価語の選択肢から、各方言にもっともふさわしいと思うイメージを複数回答で選んでもらった。提示した方言イメージの16評価語は、井上（1980）での基準を借用した。各評価語の詳細は、表2のとおりである。

ここで用いられた韓国語訳については、3名の両言語バイリンガルに判定してもらい、最終的に総合したものである。なお、井上（1980）はこの16評価語の上位分類として、知的プラス・マイナス、情的プラス・マイナスという基準を設けており、本稿でもそれを参考にしながら考察を進めていく。

表2 方言イメージの16評価語

分類	評価語
知的プラス	都会的（도회적）／近代的（근대적）／標準語に近い（표준어에 가깝다）／歯切れがよい（시원시원함）／正しい（바람직）
知的マイナス	昔の言葉を使う（진부함）／地味（촌스럽다）／重い（무겁다）／訛りがある（발음이 독특하다）／不明瞭（불분명）
情的プラス	大らか（여유롭다）／素朴（소박함）／やわらかい（부드럽다）
情的マイナス	きびしい（격심함）／豪快（호탕함）／乱暴（난폭함）

次頁の図2と図3が、両国の方言イメージについての意識調査の結果である。2.での方言正答率の分析と同じく、先に使用方言別の調整を行った上で、自方言に対する応答を排除した数値をもって最終的な計算を行った。

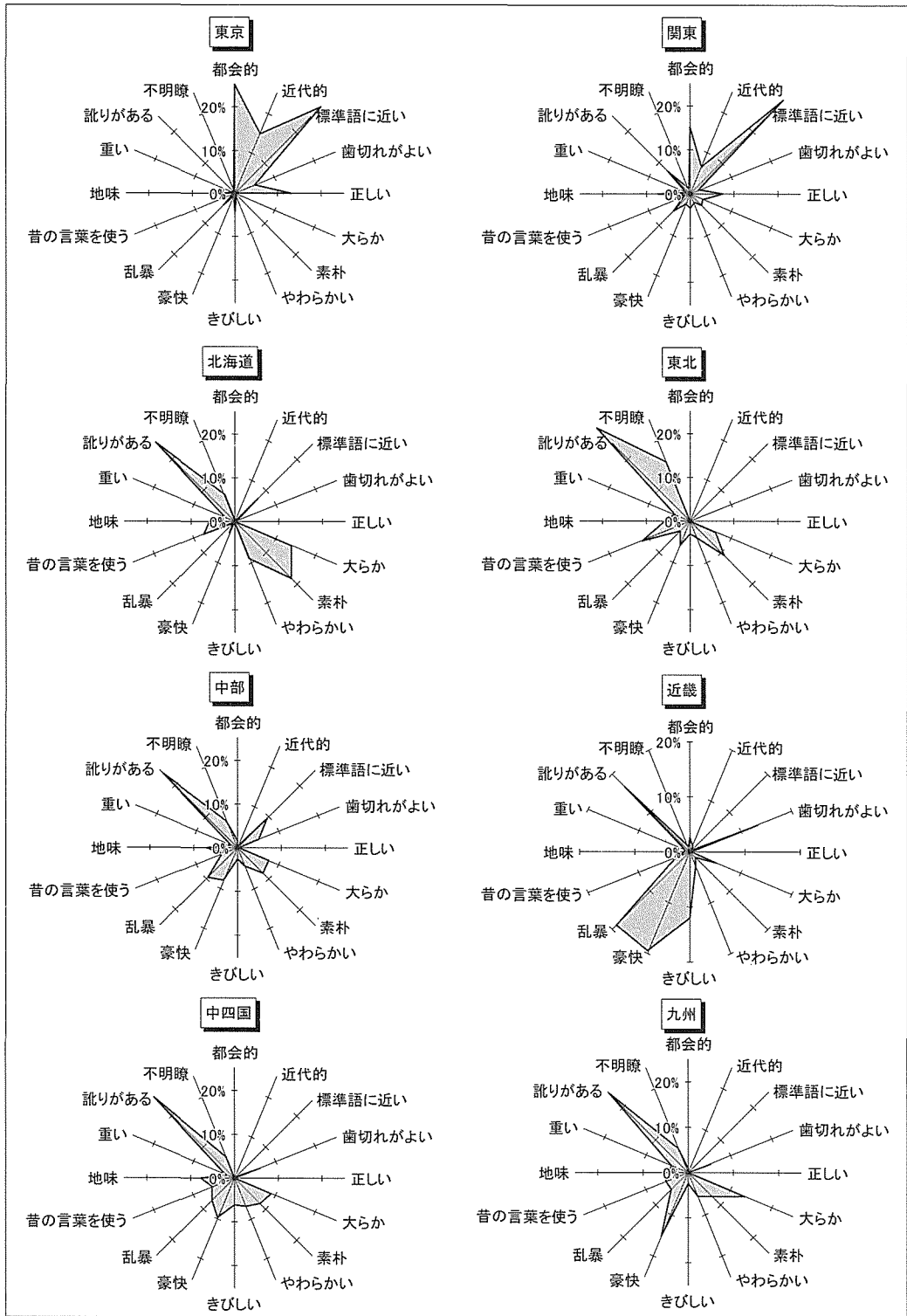


図2 日本での方言イメージ

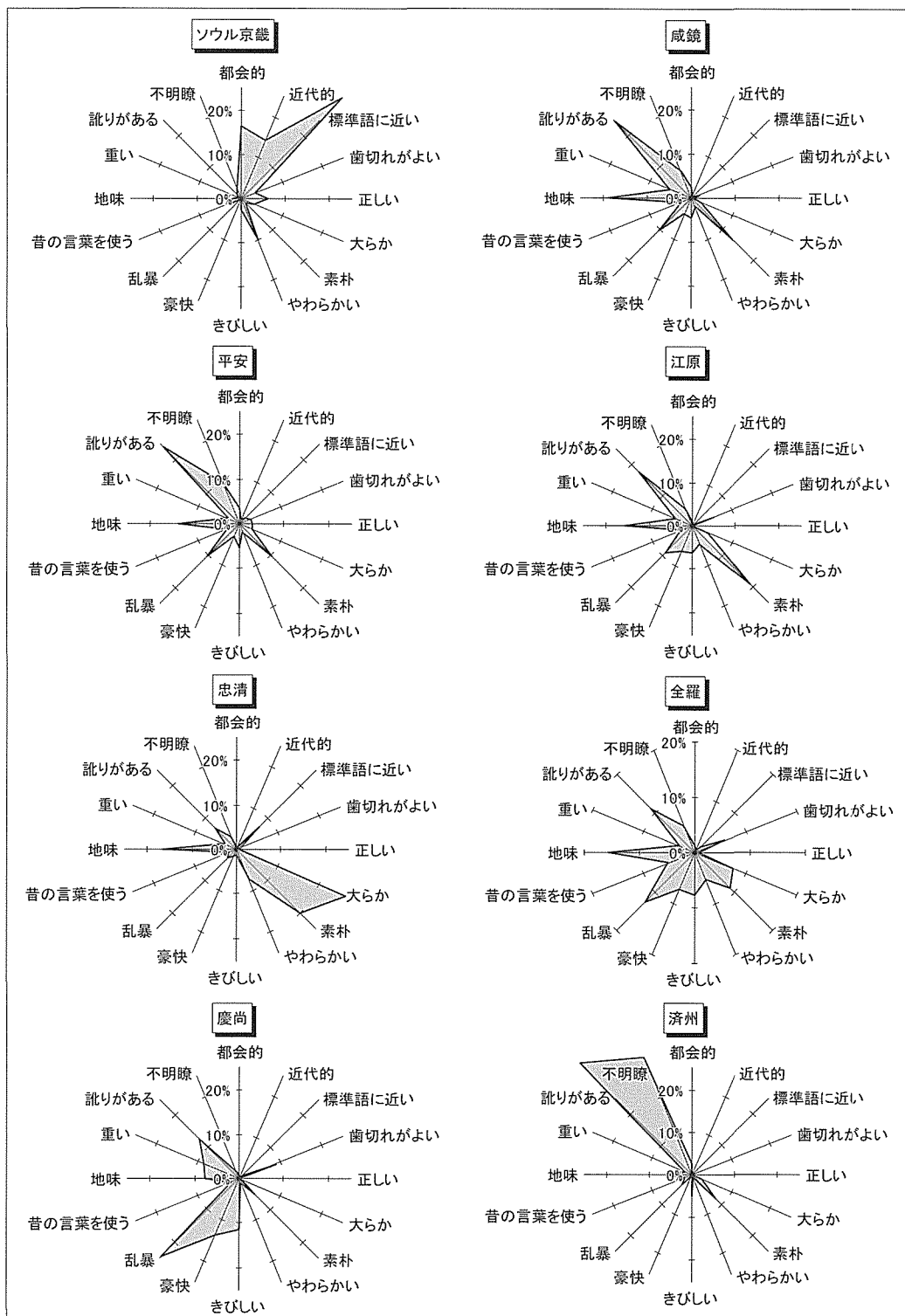
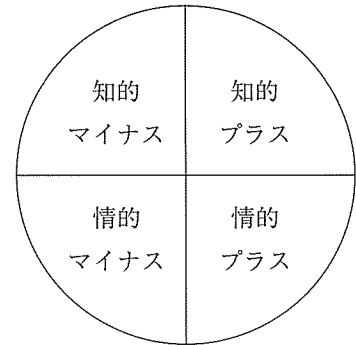


図3 韓国での方言イメージ

図2と図3では、各方言に対するイメージを視覚的によりわかりやすく示し、互いの方言を比較しやすくするためにレーダーチャートを使用した。ちなみに、チャート上のパーセンテージは方言別の応答数をもとに計算しており、16 評価語の大まかなエリアの区分は右のとおりであるので参照されたい。



3.1. 「共通語」と「方言」の対比性

まず、いわゆる「共通語」と認識されている両国の首都圏方言のイメージについて、その分析結果を見てみよう。日本の東京方言と韓国のソウル京畿方言に対するイメージは同じく「標準語に近い」「都会的」「近代的」の順に評価が高く、両者ともにグラフの線が右上にのびていることから、知的プラスのイメージが強いことがわかる。ただし、ソウル京畿方言では「やわらかい」という情的プラスの評価が見られるのに対して、東京方言ではそのような評価がまったく見られず、両者の相違点といえよう。

一方、その他の地域の方言を見てみよう。いわゆる「共通語」方言のグラフの線がもっぱら右上方向にのびているのに対し、ほかの地域方言では逆の傾向が見られる。方言ごとにバラツキはあるものの、ほとんどの方言が右上を除く残り三方向のうちどちらかにのびている。その上、両国ともにほとんどの方言で「訛りがある」という知的マイナスのイメージが目立っている。

すなわち、日本語母語話者でも韓国語母語話者でも首都圏で使われる方言が「もっとも標準的な形で知的なことば」と意識されており、ほかの地域方言については相対的に「知的ではない」と感じられる傾向が強い。以上の分析結果から、「共通語」と「方言」という方言イメージの両極化現象が浮き彫りになっており、このような対比的なイメージはすでにステレオタイプとして定着していると考えていいだろう。よって、これらを両分する知的プラス・マイナスという基準は役割語的要素としても非常に重要で、これこそ「共通語」と「方言」のもっとも特徴的な役割語スタイルとして意識されていると判断できる。

この結果は、金水(2003)の<標準語>と非<標準語>の対比的な考察を引き継ぐものである。今回の意識調査では、あえて「標準語」ということばを用いず、「東京方言」「ソウル京畿方言」を取り入れているが、それでも両言語話者の間には「標準語＝共通語＝東京方言あるいはソウル京畿方言」の意識が刷り込まれていることが明らかになった。

3.2. 「近畿方言」と「慶尚方言」の類似性

ここでは、日本の近畿方言と韓国の慶尚方言のイメージについて対照・考察する。前述した例(1)～(4)では近畿方言が韓国の忠清方言、全羅方言、慶尚方言のそれぞれ異なる形式に対応している。その中でも、とりわけ、慶尚方言については、韓国人日本語学習者の間でも「近畿方言に似ている」という意識が強い。はたして近畿方言と慶尚方言は両言語母語話者に共通する

イメージを与えているのだろうか。結論からいうと、今回の意識調査からある程度その傾向が証明された。

図2の近畿方言と図3の慶尚方言のグラフは、互いにかなり類似した図線を描いている。詳しく見てみると、近畿方言のイメージとして評価が高いのは「豪快」「乱暴」といった情的マイナスのイメージであり、これは慶尚方言の上位2評価語と同じ結果である。よって、両者ともにグラフの線が左下方向に太く長くのびており、これは、ほかのどの方言イメージとも異なる形である。この結果からすると、「豪快」「乱暴」で代表される情的マイナスのイメージは、ほかの地域方言のイメージとは区別される、近畿方言と慶尚方言のもっとも特徴的で普遍的な共通イメージであるといえる。つまり、「情的マイナス」という方言イメージは、近畿方言と慶尚方言の役割語スタイルを決定づける重要な指標になっていると予想されるのである。

今回と同じ評価語によって意識調査が行われた井上（1983）では、近畿方言のイメージとして「大らか」「やわらかい」「素朴」などがあげられており、情的プラスの方言であると示されている。もちろん、同様の評価語を使っているだけで、調査方式そのものはまったく異なるため、同じような基準で判断することはできないが、今回の分析でまったく反対の傾向が見られたことは興味深い結果である。

その理由として2つの推測を立てることができる。まず、20数年前に比べて、近畿方言に対する日本語母語話者のイメージが大きく変わった可能性である。つぎに、自方言に対する方言イメージを中心に調査を行った井上（1983）と、逆に自方言を排除して役割語としての方言イメージのみに焦点をしばった本稿の、互いの調査方法の違いによる可能性である。しかし、より明確な結論を得るためには、今後さらなる裏付け調査が必要であると考ええる。

ちなみに、1.1の例（2）では近畿方言を韓国の全羅方言に訳しているが、図3の全羅方言のグラフを項目別に見ると「訛りがある」「歯切れがよい」などの似ている部分があるものの、全体的な数値の偏り度の側面から見れば、慶尚方言ほどの類似性は認められない。

以上の結果からすると、日本語母語話者が近畿方言から思い浮かべるイメージと、韓国語母語話者が慶尚方言から思い浮かべるイメージはきわめて近似していると解釈することができる。そして、ほかの地域方言との相対的な位置づけにおいても、互いに非常に似たような役割語スタイルを示していると判断できる。よって、1.1の例（3）（4）のように、日韓・韓日翻訳の過程において近畿方言を慶尚方言に対応させることは、両者が果たしている役割語としての機能から見てある程度有効だといえるのではないだろうか。

3.3. 「東北方言」と「咸鏡・平安方言」の類似性

1.1の例（6）では、日本の東北方言と韓国の平安方言が対応している。これらの両方言は同じく北部地域という地理的な共通点も持っている。ここでは、日本の東北方言と朝鮮半島北部の咸鏡・平安方言を取りあげ、その方言イメージについて考察する。

両国の方言を比べる前に、まず、韓国の咸鏡方言と平安方言のイメージの類似性について述べる。2.の方言正答率の対照の中で、現代の韓国社会の若い韓国語母語話者が、咸鏡方言と平安方

言をあわせて北部方言として意識していることについて述べた。そして、図3の結果からふたたびその傾向が証明された。

図3で見ると、咸鏡方言と平安方言は両者ともに、「訛りがある」「地味」といった知的マイナスの評価が高く、グラフの線が左上方向にV線を描いている。なお、「乱暴」という情的マイナスのイメージ、「素朴」という情的プラスのイメージの評価が高いのも同じで、両者のグラフの線全体がほぼ完全に重なっているともいえる。

これは、「役割語」という本稿の観点からすると重要なポイントである。つまり、「咸鏡方言」「平安方言」といった方言形式の言語内的な相違と、方言意識という言語外的な相違が必ずしも一対一に対応するものではないということが確認されたのである。これによって、役割語としての方言の存在を、言語学的な方言分類とは異なる新たな観点から再認識し考察していく必要性があらためて明確に示されたといえる。以上の理由から、ここでは、日本の東北方言と対照する韓国の方言を、咸鏡・平安方言という統合体として想定して考察を進めていきたい。

では、図2の東北方言のイメージを見てみよう。もっとも評価が高いのは「訛りがある」「不明瞭」「昔の言葉を使う」で、きわめて知的マイナスのイメージである。韓国の方言で「訛りがある」「不明瞭」というイメージがもっとも強く見られたのは済州方言である。しかし、数値の偏り度を含めた全体的なグラフの図形からすると、東北方言にもっとも類似した線を描いているのは咸鏡・平安方言であることが、図2と図3を見比べてみるとわかる。よって、日本語母語話者が東北方言に抱いている方言イメージと、韓国語母語話者が咸鏡・平安方言に抱いている方言イメージの間には類似している点が多く、似たような役割語スタイルを表していることが明らかになった。

ちなみに、1.1の例(6)では韓国小説の平安方言を東北方言に当てているのだが、逆に、日本のフィクションに登場する東北方言話者のイメージを韓国語訳の作品の中で再現する上でも、韓国の咸鏡・平安方言は有効なアイテムであるといっていいたいだろう。

4. 方言による人物類型の対照

ここでは、両言語母語話者が自国の各地域方言を聞いてどのような人物像を連想するか、つまり、各地域方言話者の人物類型についての意識を考察する。これは、3.で浮き彫りになった「役割語スタイル」が具体的にどのような働き方を見せるのかに注目し、本稿での考察対象である「ステレオタイプ化された方言」により直結する形で各方言への意識を可視化するためである。すなわち、方言を人物類型につなげて分析することで、方言ごとに焼きついているステレオタイプがさらに具体化し、役割語度の観点から各方言同士の序列的な位置づけもかいま見ることができると考える。

調査票では、各方言名を提示し、それらにもっともふさわしいと思う人物類型を21要素の中から複数回答で選んでもらった。表3に、人物類型を表す21要素を示す。

表3 人物類型を表す 21 要素

分 類	項 目
肯定的 ↑	エリート(엘리트 사원)／国際ビジネスマン(국제 비즈니스맨)／おしゃれ(멋쟁이)／ 愛妻家(애처가)／情が厚い(인정있는 사람)／男らしい(남자다운 사나이)／グルメ (식도락)／お笑い(개그맨)／派手(옷이 요란한 사람)／おしゃべり(수다쟁이)／頑 固(옹고집)／田舎者(시골사람)／まぬけ(어수룩한 사람)／冷たい(쌀쌀맞은 사람) ↓ ／プレーボーイ(바람둥이)／プー太郎(백수전달)／下品(품위없는 사람)／ケチ(수 전노)／ゴマすり(아부쟁이)／チンピラ(깡패)／ベテン師(사기꾼)
否定的	

これらの要素は、上記の 16 評価語から予想されるものや、一般に広まっていると判断したステレオタイプなどからヒントを得て、本稿で独自に提示した基準である。さらに、表 3 には便宜上「肯定的」「否定的」という分類を設けているが、これは、3 名の両言語バイリンガルの意見をまとめた順序であり、絶対的な基準となるものではないことを断っておきたい。

この分析結果をレーダーチャートに示したのが、次頁の図 4 と図 5 である。すべての分析は前述したほかの分析と同じく、「使用方言別百分率」「自方言応答排除」という 2 つの原則にもとづいて行われた。この分析結果を、上記の 3. での考察内容に合わせた順序で述べていく。

第一に、「共通語」と「方言」の対比性と関連した考察である。3.1 の分析で、日本の東京方言と韓国のソウル京畿方言は同じく知的プラスのイメージが強いのに対して、その他の地域方言は知的マイナスのイメージが強く、知的イメージという側面に対比的な役割語スタイルが見られることについて述べた。このような「共通語」と「方言」の対立するステレオタイプは、その人物類型についての意識調査の結果でもある程度認められた。

日本の東京方言と韓国のソウル京畿方言の人物類型として多い応答に、肯定的要素では「エリート」「国際ビジネスマン」「おしゃれ」、否定的要素では「プレーボーイ」「冷たい」がある。図 4 と図 5 での両方言のグラフを見てみても、非常に類似した線を描いていることがわかる。つまり、日本でも韓国でも、いわゆる「共通語」と認識されている方言の話者には似たような人物類型を連想するということが予想される。

一方、一樣にはいえないが、その他の地域方言のグラフを見てみると、両言語ともに「情が厚い」「田舎者」という 2 つの要素が際だって高い数値を示しており、グラフの線が 2 時 35 分方向へ長くのびているものが多い。よって、これらの 2 つが「共通語」に対立する「方言」の人物類型を構成する代表的な役割語の要素だといっていだろう。

金水(2003)は<標準語>をヒーローのことばと表現しているが、同じ脈絡から、もしフィクションの登場人物を「知的でない」人間に描きたいのであれば、東京方言あるいはソウル京畿方言を排除する工夫も 1 つの戦略として取り入れられるであろう。当然ながら、そのような創作上の方略は翻訳というプロセスの中でも十分考慮すべき事柄である。

第二に、「近畿方言」と「慶尚方言」の対照考察である。3.2 では、日本の近畿方言と韓国の慶尚方言の類似性について述べた。しかし、図 4 と図 5 を比べてみると、方言イメージは同じで

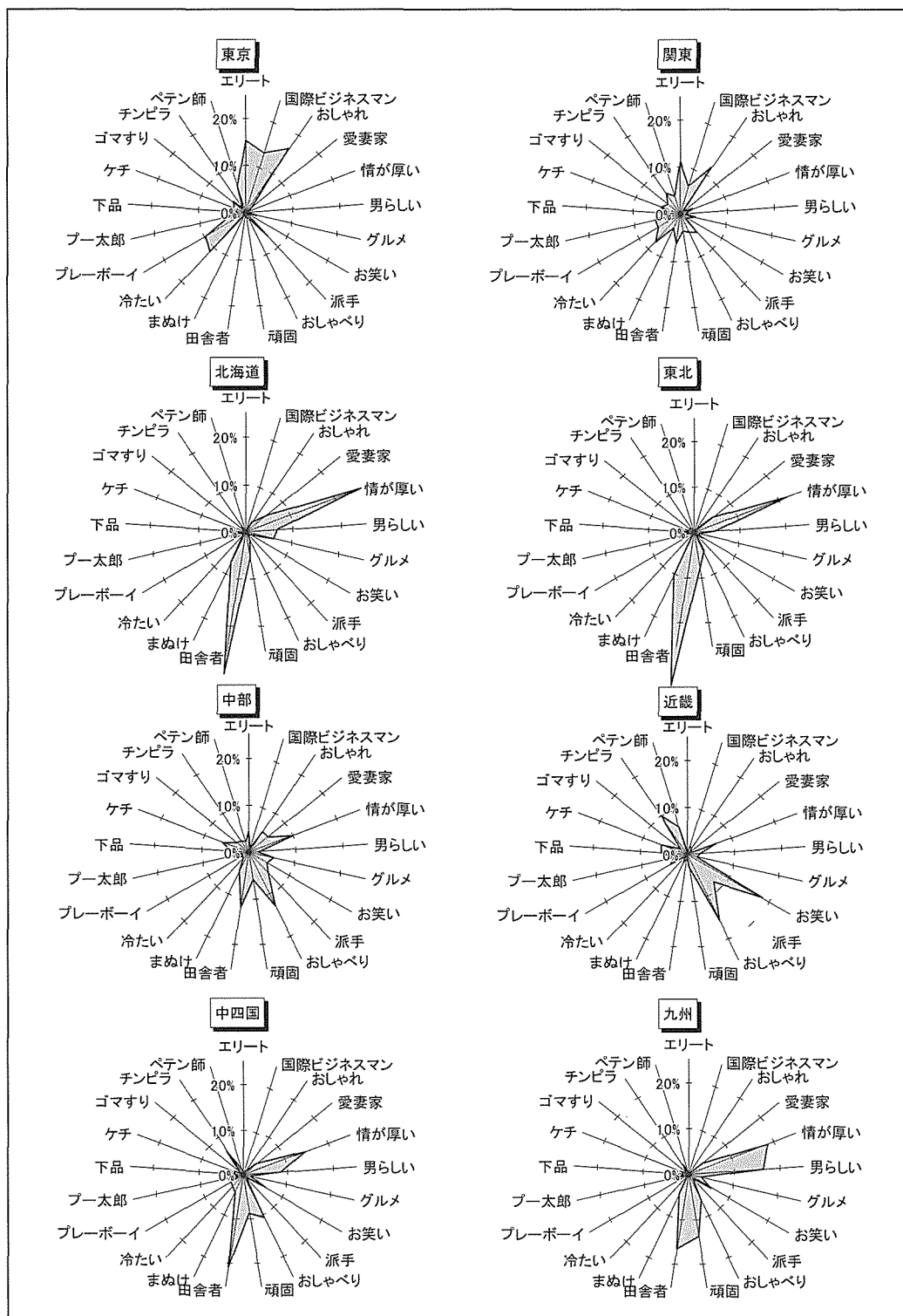


図4 日本の方言別の人物類型

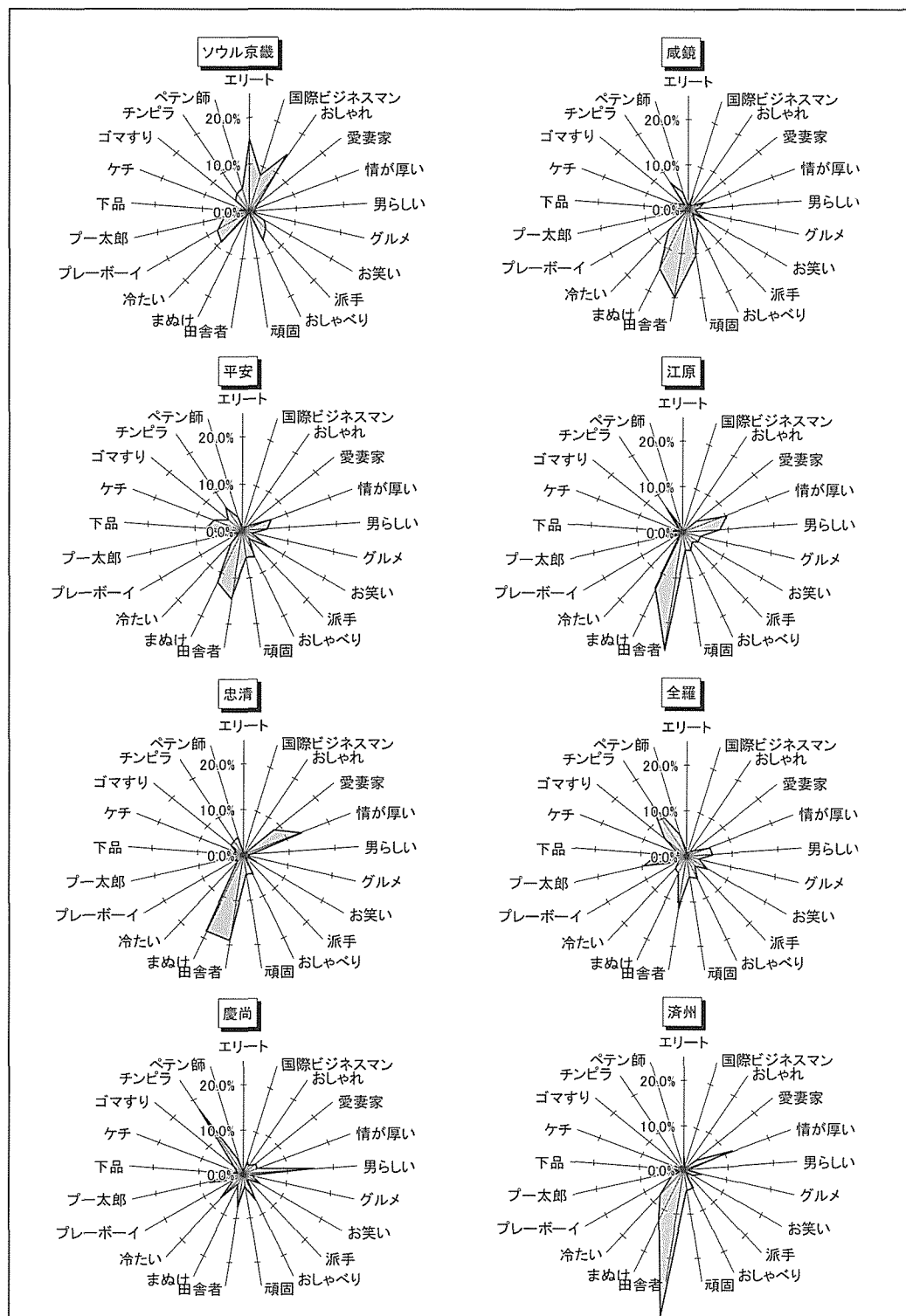


図5 韓国の方言別の人物類型

も、そこから連想する人物類型は両者の間でかなりのギャップがあることがわかる。

近畿方言の場合、もっとも応答率の高い要素は「お笑い」と「おしゃべり」である。ほかの地域方言に多く見られる「田舎者」「まぬけ」という要素はまったく見られない。つまり、他方言とは確実に差別化された近畿方言独自の人物類型が作り上げられているのである。その背景に、お笑いブームとともにメディアから全国に広まった、いわゆる「吉本弁」の影響があることは否めないだろう。これは、役割語としての近畿方言の地位を確固たるものにするのにも大きく寄与したと考えられる。

ちなみに、今回の調査での本質問の形式は自由・複数回答だったのだが、近畿方言の人物類型についての応答数は1,344で、トップの東京方言への応答数1,345とほぼ同じくらい多かった。3位の九州方言への応答数899に比べてもその差は著しい。これは、各地域方言の中でも、とりわけ近畿方言に対する日本語母語話者の関心度が高いことを示す結果であり、ひいては近畿方言の役割語度が他方言のそれに比べて非常に高い可能性をうかがわせる結果ともいえる。「社会の共通意識としての役割語」の観点から見て、お笑いブームによる吉本弁の台頭が近畿方言に対する共通意識の確立に主要な要因として働いたことは確かである。

一方、慶尚方言の場合、もっとも応答率の高い要素は「男らしい」と「チンピラ」である。とりわけ、「男らしい」という要素は日本の九州方言でも高い数値を示しているが、これは非常に興味深い結果だと思われる。日本に「九州男児」ということばがあるように、韓国には「慶尚道の男（경상도 사나이）」ということばがある。根拠は乏しいながらも、特定の言語表現をもとに長年根づいてきたステレオタイプが両国の若い世代の間にまで深く浸透していることが、この結果から読み取れる。これも同じく、「社会の共通意識としての役割語」という大前提を再確認させる事例として捉えることができる。

方言イメージでは似たような役割語スタイルを見せていた日本の近畿方言と韓国の慶尚方言だが、そこから思い浮かべる人物類型の間にはかなりの隔たりがある。これは、メディアや言語表現などのなんらかの刺激要因によって、両言語母語話者が持っているステレオタイプの一部分が拡大、過剰一般化され、そのまま極端な人物類型につながっているためだと判断できる。よって、ある方言が役割語としてどの程度の機能を持っていて、こういった役割語スタイルを表しているのかを議論する際には、より多角的な側面から各要素を照らし合わせながら総合的に判断する必要があると考える。本稿で、「方言正答率、方言イメージ、方言による人物類型、方言に対する好悪意識」といった4つの側面から「役割語としての方言」を考察するのもこのような理由からである。

第三に、「東北方言」と「咸鏡・平安方言」の対照考察である。3.3では、韓国の咸鏡方言と平安方言のイメージが非常に似ていて同じ役割語スタイルを表していることと、この両方言と日本の東北方言のイメージに共通する役割語的要素が多いという2点について述べた。

図5で咸鏡方言と平安方言を見比べてみると、まず、中心から左下の「田舎者」「まぬけ」といった方向に線がのびている点は、ほかの地域方言と共通していることがわかる。しかし、咸鏡方言と平安方言の間には、「情が厚い」の評価がきわめて低いなど、他方言より細かい傾向にお

いて互いに共通点が多い。2. と、3.3 でくりかえし強調したように、やはり、若い世代の韓国語母語話者は、方言で連想する人物類型においても、咸鏡・平安方言話者を北部方言話者というまとまりで意識しているといえよう。

これまでの結果から、「咸鏡方言」、「平安方言」というふうに方言形式は異なっているけれども、役割語としての機能においては、両方言とも同じような役割語スタイルと役割語度を表していることがわかった。これは、日本の方言だけを対象にした役割語研究では見られない傾向であり、南北分断という韓国の社会状況が生み出した新しい役割語の傾向として受け止めることができ、非常に興味深い結果だと考える。

つぎに、東北方言の人物類型の結果を見てみよう。図4での東北方言のグラフは2時35分の時計針のような線を描いていて、前述した「共通語」に対する「方言」の典型的な人物類型を表していることがわかる。おもしろいことに、このような東北方言とはほぼ同じような線を描いているのが、地域的に同じ北部である北海道方言のグラフである。韓国の咸鏡方言と平安方言が、同じ北部方言として似たような人物類型を表したのと相通じる結果となっており、もし、この両者の間にも「北部出身の人」という形でのステレオタイプが形成されているとすれば、地理的な近接性も役割語スタイルを決める1つの基準と考えることができるであろう。

最後に、図4の東北方言と図5の咸鏡・平安方言を比べてみると、全体的なグラフの図形に3.の方言イメージでの結果ほど酷似した傾向は見られない。「田舎者」「まぬけ」といった否定的要素がもっとも高い数値である点では3方言ともに共通しているが、東北方言で「情が厚い」などの肯定的要素の評価が高いという面では、韓国の済州方言により近い傾向を見せている。3.の方言イメージの比較でも、東北方言と済州方言の間には、知的マイナス傾向が強いという共通点が見られた。今後、東北方言と済州方言の役割語としての共通点や翻訳上での対応可能性などについても注目していきたい。なお、2つの方言の役割語スタイルの類似性を論ずるにあたって、特定項目での濃密な類似性と幅広い項目での全体的な類似性のうち、どちらをより主要な傾向として捉えるべきなのかといった疑問についても、今後さらに思考を深めていきたいと考える。

5. 方言に対する好悪意識の対照

これまで、両言語母語話者の自国の方言に対するイメージと、方言から連想する人物類型について、特徴的ないくつかの方言に焦点を当てて分析を行った。ここでは、以上の考察で明らかになった方言イメージと人物類型に、両言語母語話者の各方言への好悪意識が連動しているかどうかを調べる。

前述した3.では各方言に対する知的・情的評価、4.では方言別人物類型を形成する肯定的・否定的評価といった基準を手がかりにして、「ステレオタイプ化された方言」について述べてきた。そもそも「ステレオタイプ」とは、世の中のさまざまな事象をカテゴリー化して、その各カテゴリーになんらかの評価を与えることで外界を整理しようとするところから出発する。そして、そこには必然的に「好き」「嫌い」といった好悪意識が結びついてくる。

勅使河原（2007）では、北米でのアニメ音声に関する先行論文の引用から、「善玉は北米標準

アクセントで話すのに対し、悪玉はロシア語やドイツ語などの外国語の訛り、あるいは否定的なイメージを持つ方言、すなわち非標準語的な訛りで話す」という調査報告が紹介されている。さらに、金水（2003）でも、＜標準語＞と非＜標準語＞の対立性を説明するのに「ヒーローのことは」と「脇役のことは」という表現が用いられており、役割語としての方言と好悪意識との関連性について示唆を与えている。

したがって、ここでは、3.と4.で確認された各方言の役割語としての傾向が、両言語母語話者の方言に対する好悪意識にどういう形で関わってくるのかといったところに注目していく。

調査票では、自国の方言の中から好きな方言と嫌いな方言を選んでもらい、その理由を記述式で記入してもらった。その内容を、「使用方言別百分率」「自方言応答排除」の原則のもとに計算して順位別に並べたのが表4である。

それでは、ふたたび3.と4.で注目した方言を中心に考察を行う。

第一に、「東京方言」と「ソウル京畿方言」である。両言語の「共通語」と認識されているこれらの方言だが、前節までの考察では両者ともに、「知的プラス」という方言イメージと「知的だが冷たい」という人物類型を示しており、役割語スタイルにおいて非常に似た傾向が見られた。はたしてこれらの結果が好悪意識という側面ではどのように影響するのだろうか。表4の結果によると、両言語間で微妙な違いが見られる。

まず、東京方言の場合、嫌いな方言では1位だが、好きな方言ではかなり順位が低い。よって、全体的に、知的プラスのイメージより情的マイナスのイメージのほうが、好みの基準として有力に働いていると推測できる。

表4 各方言に対する好悪意識

(%)

	日本		韓国	
	好きな方言	嫌いな方言	好きな方言	嫌いな方言
1	近畿 (26.3)	東京 (33.8)	慶尚 (45.7)	済州 (23.0)
2	東北 (23.3)	近畿 (25.8)	ソウル京畿 (24.5)	全羅 (22.4)
3	九州 (19.2)	東北 (17.0)	全羅 (9.2)	ソウル京畿 (18.5)
4	中四国 (10.8)	中部 (6.8)	忠清 (7.6)	慶尚 (10.0)
5	東京 (8.7)	関東 (6.4)	江原 (7.2)	忠清 (7.5)
6	中部 (5.7)	九州 (4.7)	済州 (3.0)	江原 (6.2)
7	北海道 (3.1)	中四国 (4.1)	平安 (1.8)	咸鏡 (4.5)
8	関東 (3.0)	北海道 (1.5)	咸鏡 (0.9)	平安 (0.9)

一方、ソウル京畿方言の場合、好きな方言2位、嫌いな方言3位で、下位方言と数値的にもかなりの開きが見られる。両方で上位にあがっているということは、まずソウル京畿方言への関心の高さを表すと考えていいだろう。さらに、この結果は、ソウル京畿方言が好きな人と嫌いな人の間で、好みの基準がずれていることを意味する。3.1で、東京方言と異なるソウル京畿方言の役割語的要素として「やわらかい」という情的プラスのイメージがあると指摘したが、このよう

な違いが表4の「好きな方言」の結果に反映されているように思われる。

これは、選んだ理由についてのコメントからも確認することができる。東京方言が嫌いな理由では「冷たい」といった応答がもっとも多い。一方、ソウル京畿方言の場合は、好きな理由に「やわらかい」、嫌いな理由に「女らしい」「男が使うとむかつく」などがある。同じ方言形式でも、受け入れる側の評価の態度によってその人物類型が相反しており、互いに表裏一体の関係にあるところが興味深い。

第二に、「近畿方言」と「慶尚方言」である。これらの方言は、ともに好きな方言の1位であり、その数値も高い。両者ともに方言イメージ調査では情的マイナスの評価が非常に高かったことを考えると、これは注目に値する結果といえよう。方言イメージより、近畿方言の「おしゃべり」「お笑い」、慶尚方言の「男らしい」といった人物類型のほうが、両言語母語話者の好悪意識により強く作用しているように思われる。他方言と差別化される独自の人物類型の要素が、当該方言への興味と好感を引き起こす要因として働いたという推測も可能である。また、このような役割語スタイルの傾向はそのまま「高い役割語度」につながり、この両方言は他方言から一目置かれる代表的な役割語として位置づけられることになったと考えていだろう。

しかし、近畿方言においては、嫌いな方言の順位もかなり高く、ソウル京畿方言と同じように、同じ方言形式に対する異なる評価態度の可能性がうかがえる。選んだ理由についてのコメントをみても、好きな理由として「ノリがいい」「感情がこもりやすい」「インパクトがある」などがあがっている反面、嫌いな理由として「うるさい」「きつい」「こわい」などの意見があり、見方による受け止め方の違いが表れている。

第三に、「東北方言」と「咸鏡・平安方言」である。東北方言が好きな方言2位、嫌いな方言3位と、広く認知されていることが予想できる結果なのに比べ、咸鏡・平安方言の場合、両者ともにそれほど目立たない結果となっている。現代の韓国社会で実際に咸鏡・平安方言に接する機会がほとんどないということが、これらの方言に対する個別認知度の低さを招き、それが好悪意識においてもこのような結果を生んだのではないかとと思われる。結論的に、現代韓国社会において咸鏡・平安方言で代表される北部方言は、少なくとも役割語度という観点から見たときに、「それほど濃度の高い役割語ではない」ということがいえるのではないだろうか。

以上の考察でもっとも興味深い点は、ソウル京畿方言、近畿方言、東北方言における「好きな方言」と「嫌いな方言」の数値がともに高いという結果である。一見矛盾しているようにも見えるが、これは役割語という観点からすると重要なポイントといえる。この結果は、これらの方言に対する関心の表れであり、裏を返せば、これらの方言の役割語度が非常に高いという証明にもなる。普段気になっているからこそ思い浮かべるイメージや意識も豊富であり、好きにも嫌いにもなりやすいのであろう。

6. まとめ

ここまで、日本語母語話者と韓国語母語話者への意識調査を通して、日本と韓国の各方言への意識を対照・考察した。「方言正答率、方言イメージ、方言による人物類型、方言に対する好悪

意識」といった4つの側面から分析した結果を、以下の4点にまとめることができる。

- 1) 韓国語母語話者に比べて日本語母語話者のほうが方言正答率が高く、日本の方言の役割語としての機能性が高いことを示唆している。
- 2) 「共通語」と「方言」は、方言イメージと人物類型という両面で互いに対比的な役割語スタイルを形成しており、このような傾向は両言語母語話者の間に共通している。
- 3) 日本語母語話者の「近畿方言」意識と韓国語母語話者の「慶尚方言」意識は役割語スタイルの面で共通点が多い。一方、人物類型の結果から一部のステレオタイプの過剰一般化が見られ、これらの要素が両方言の役割語度アップを促進していると予測される。
- 4) 日本語母語話者の「東北方言」意識と韓国語母語話者の「咸鏡・平安方言」意識は、役割語スタイルの面で共通点が多い。一方、好悪意識の結果から「東北方言」に比べて「咸鏡・平安方言」の役割語度がきわめて低い可能性がうかがえる。

以上のほかに、韓国語母語話者が咸鏡・平安方言を北部方言としてまとめて意識する傾向と、同じ方言形式に対して相反する評価態度が見られることについても、さまざまな分析結果をもとに述べてきた。

冒頭でも触れたように、方言は、役割語の中でも非常に役割語度の高い形式として位置づけられる。よって、翻訳において方言を方言に訳すことには期待される効果も大きければ、さらなる誤解を生み出す危険性も多くはらんでいる。今後も増え続ける日韓・韓日翻訳の中で、役割語としての両言語の方言がその役目をしっかり果たすためには、本稿で示した意識調査の分析結果のように、両言語母語話者が自国の各方言に対してどのような意識を持っているかを整理、提示していく試みが必要不可欠である。そのために、ここでは「役割語スタイル」と「役割語度」といった側面から、両言語の方言間に存在するステレオタイプの共通点と相違点を明らかにしてきた。その共通性による相乗効果を最大限に生かしてこそ、役割語翻訳だけに留まらず作品全体のより質の高い翻訳を実現することができる。さらに、本研究が、両言語教育の中で今後「役割語」をどのように取り上げていくべきかを考えさせ、「役割語」を重要な教育項目として再認識するための新たな気づきを与えてくれることを期待する。

注

- 1 aが原作、bが翻訳本である。記号や句読点などを含む文の形式は、すべて元の作品の形をそのまま転記している（以下同様）。
- 2 対象とした全方言地域で調査を行うのがもっとも望ましいのだが、現実的に困難だったために、数量的にもっともデータを集めやすい地域ということに重点を置いて7地域を選んだ。
- 3 韓国の方言区画のうち、「咸鏡」と「平安」は、現在の北朝鮮地域にあたり、行政的な区分からすれば韓国方言とはいえないが、今回の調査はあくまでも言語学的観点から進められたため、あえて省くことはしなかった。

参考文献

李翊燮他（2004）『韓国語概説』大修館書店

- 井上史雄（1980）「方言のイメージ」『言語生活』341, 48-56, 筑摩書房
- 井上史雄（1983）「方言イメージ多変量解析による方言区画」平山輝男博士古稀記念会編『現代方言学の課題』1, 71-98, 明治書院
- 井上史雄・吉岡泰夫監修（2003a）『近畿の方言－調べてみよう暮らしのことば』ゆまに書房
- 井上史雄・吉岡泰夫監修（2003b）『中国・四国の方言－調べてみよう暮らしのことば』ゆまに書房
- 井上史雄・吉岡泰夫監修（2003c）『九州の方言－調べてみよう暮らしのことば』ゆまに書房
- 井上史雄・吉岡泰夫監修（2004a）『関東の方言－調べてみよう暮らしのことば』ゆまに書房
- 井上史雄・吉岡泰夫監修（2004b）『中部の方言－調べてみよう暮らしのことば』ゆまに書房
- 井上史雄・吉岡泰夫監修（2004c）『北海道・東北の方言－調べてみよう暮らしのことば』ゆまに書房
- 金水敏（2003）『もっと知りたい日本語 ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
- 佐藤和之・米田正人（1999）『どうなる日本のことば－方言と共通語のゆくえ』大修館書店
- 鄭惠先（2005）「日本語と韓国語の役割語の対照－対訳作品から見る翻訳上の問題を中心に－」『社会言語科学』8（1）, 82-92, 社会言語科学会
- 勅使河原三保子（2007）「声質から見た声のステレオタイプ」金水敏編『役割語の地平』, 49-69, くろしお出版

用例出典

（下線は本文中の略語）

- クアク・キョンテク（2002）『友へ チング』ポニーキャニオン（DVD）
- 朴商延（金重明訳）（2001）『J S A 共同警備区域』文藝春秋
- 真斗・日下秀憲（1997）『ポケットモンスター スペシャル1』小学館
- 羅川真里茂（2002）『東京少年物語』白水社
- 박상연（1997）『DMZ』민음사（日本語版の題名は『J S A 共同警備区域』）
- MARIMO RAGAWA(서수진訳)（2003）『동경소년이야기』대원씨아이
- MATO・KUSAKA Hidenori(김혜정訳)（1999）『포켓몬스터 스페셜 1』대원씨아이

（投稿受理日：2007 年 6 月 28 日）

（最終原稿受理日：2008 年 1 月 10 日）

鄭 惠先（ちょん へそん）

長崎外国語大学外国語学部

851-2196 長崎市横尾3丁目15-1

jung@tc.nagasaki-gaigo.ac.jp

The comparison of dialect consciousness between Japanese and Korean: From the standpoint of role language

JUNG Hyeseon
Nagasaki University of Foreign Studies

Keywords

degree of role language, style of role language, dialect images, character, likes and dislikes

Abstract

The purpose of this paper is to clarify the similarities and the differences between Japanese and Korean dialects as role language (hence RL). The findings of this paper may promote better translation between Korean and Japanese. For the purpose of making it clear, a questionnaire of dialect attitude was conducted on native speakers of Japanese and Korean from both countries. The four results are summarized as follows: (1) it was expected that the degree of RL in Japanese dialects is higher than that in Korean dialects; (2) both native speakers have a similar intuition concerning the style of RL. It shows the remarkable difference between the common dialect and the other local ones; (3) the style of RL toward “*Kinki* dialect” is similar to those toward “*Kyongsang* dialect.” It was presumed that stereotypical ideas of “*Kinki* dialect” and “*Kyongsang* dialect” cause to build the degree of RL for each dialect; (4) the style of RL toward “*Tohoku* dialect” is similar to those toward “*Hamkyong* dialect” and “*Pyongyang* dialect.” However, it was expected that the degree of RL toward “*Hamkyong* dialect” and “*Pyongyang* dialect” is remarkably lower than those toward “*Tohoku* dialect.” Consequently, the similarities between Japanese and Korean attitudes toward dialect help translate each other more naturally.